

大田南畝『調布日記』における詩情について

池 澤 一 郎

六代目三遊亭円生（一九〇〇～七九）は、狂歌囃「紫檀楼古木」

のマクラに狂歌の名手としての蜀山人の伝説の幾つかを紹介した。^①伝説とするのは、引用される狂歌が現存する大田南畝の作と認定される狂歌群の中に見出せないからである。円生は蜀山人伝説を語り終えるに当って、南畝が漢学も出来て、その筋の弟子がいたことを「しかし、この蜀山人という方はただ狂歌だけを詠んだのかというと、そうではないんだそうで、漢学の方には非常に長けておりました、当時、塾をひらいた。ここへは随分多くの弟子が来たといえます」と強調している。これが満更誇張の言ではないことは、南畝門下から友野霞洲、鈴木猶人といった昌平饗の錚々たる儒官を輩出していることに確認できる。

江戸狂歌を鑑賞する場合、一般には、一首に詠じられた江戸の風俗を考証し、その本歌をなす和歌をつきとめ、それとの落差を測定するといった手順をふむわけであり、そこに漢学が入り込む餘地はないかのように思われている。

しかしながら南畝には次のような狂歌もある（『蜀山家集』二）「あ

やめ草^②」。

高館に灯張れば風清く夜鐘残月雁帰声

不知心誰をか恨む朝貞はたゞるりこんのうるほへる露
後者は天明三年（一七八三）刊の『万載狂歌集』にも「唐詩のことばにて朝がほの歌よめと人のいひければ」という前書きとともに見えるものだが、李白の五言絶句「怨情」（『唐詩選』）の後半に「但だ見る 涙痕の湿^{うるは}へることを、知らず心誰をか恨む」とあるのを使い、前者は高適^{せき}の七言律詩「夜草^{やぐさ}司士に別る」（『唐詩選』）の「高館張燈酒復清、夜鐘残月雁帰声」という一聯を使うものである。

また同じ「あやめ草」の最晩年の文政五年の詠草を列した中に
も、

入洞題松遍

天台の霞の洞に入ぬればからうた書ん松原のまつ

看花選石眠

ねご、ろのよろしきところえらびつ、石の上にも三春の花

という漢詩の一句を前書きにした一種の句題和歌が見える。右の二首の句題は、『唐詩選』、『三体詩』、『古文真宝前集』といった通行のアンソロジーには見えず、中唐、張籍の別集『張司業詩集』に見える「殷山人に贈る」と題する全六十句からなる一韻到底の長編古詩の中から第十三、十四句の一聯を摘んだものである。ただし、前者の「遍」は原詩では「過」に作る。南畝の間違いなのか、写本作成者の書き損じなのかは詳らかにせぬが、それぞれ「天台の霞」、「からうた」、「三春の」なぞといった脚色を加えてはいるものの、ほぼ句題となっている漢詩句を忠実に翻案した歌であると見てよからう。

句題和歌は平安朝の昔から存していたが、平安朝の大江千里の八十八首と、中世、定家、慈円が白居易の詩句を句題とした『文集百首』あたりを頂点と見てよい。南畝の狂歌にも白居易の詩を句題としたと見なしているものがある。

白氏が詩を誦して

したときもわかつ家桜花さく門やさしいりてみん

南畝が愛誦した「白氏が詩」が何であるかは狂歌そのものから察する他はないが、まずは「遙かに人家を見て花あれば便すなはち入る、貴賤と親疎とを論ぜず」（『白氏文集』巻三十一「春を尋ねて諸家の園林に遊ぶ。又た一絶を題す」）の一聯であることらんで間違いはなからう。この一聯は『和漢朗詠集』上巻・春・「花」にも収録されている。もちろん『文集百首』においても句題詩のひとつとなっている。ここでは句題詩そのものは隠れていたが、南畝の踏んだ手順は定家・慈円と同じであろう。つまり白詩の一聯を舌頭に反復

して、三十一文字の歌に訳したのである。

翻つて考えるに、南畝の狂歌のみならず、平安朝以来の和歌には句題を明記せざるも、白居易を筆頭に、漢魏六朝や唐宋の詩人の詩句を隠れた句題とした和歌は少なくなからう。しかしながら、そのことを従来、和文・和歌のみを主たる研究対象とする日本古典文学研究は故意に閑却して来た。偏狭なナシヨナリズムやジャンルの細分化した近代以降の学問の趨勢と、何よりも国文学者の漢詩文読解力の低下に累されてのことといつてよい。漢詩文を日本古典文学から除外する思考方法に呪縛されている国文学者は今でも跡を絶たない。むしろ、少数の例外を除き、国文学者の主流は相変わらず、漢詩文と和歌和文とが密接不可分からみあっている古典作品のありのままの姿を、偏見によって一面的にしか捉えられていないことを反省せずに、漢詩文を研究対象からはずし、涼しい顔をしているというのが常となっている。本稿では南畝の『調布日記』を材として、右に見たような狂歌のみならず、和文作品においても南畝の漢学の素養が重要な役割を担っていることを実証する。

『調布日記』を含む南畝の日記・紀行に酷評を下したのは、杉浦明平氏であった。曰く、「どれも勘定所の下層役人としての出張旅行であって、たいして困難も冒険もなく、ただ丹念に目についたものを書きとめていることで、地方史研究家の参考になるくらいのところであろう。文学的な興味をかきたてるほどのものではない」⁽³⁾と。こうした発言に対しては、揖斐高氏が柳田国男の文章を引用されつつ、南畝擁護の文章を書かれている⁽⁴⁾。本稿では

さらに、行文の漢詩の機能に着目して、南畝紀行文の「雪冤」を重ねて行く。

一

『調布日記』は文化五年（二八〇八）十二月十六日の日記から開始されている。起筆は翌年の三月十九日である。年が明ければ還曆を迎える南畝は、勘定所の役人として、この年の夏に猛威を振るった集中豪雨のために決壊した処々の河川の堤防の修復工事を監督する任務を帯びて、寒中老齢に鞭打って、現在の調布市から立川市にかけての多摩地区を巡回するために出張した。任を終えて江戸帰着後の、五月五日に至るまでの記録が『調布日記』であり、出張中に目にした寺社や旧家の古文書や碑文の抄出、折々に詠じた詩歌を記録した副産物として『玉川砂利』、『玉川披砂』、『向岡閑話』、『玉川余波』がある。南畝の名高い筆まめ、筆の速さは、犬塚印南が『向岡閑話』の跋文で「他人は三年の久しきを以てするも、成す能はざる所なり焉。而れども翁は則ち十句の行に、能く之を成す。他人は十夫の雇ひを以てすれども、給する能はざる所なり焉。而れども翁は則ち一人の手もて能く之を書す。終夜寝ねず、両手並びに下すと雖も、尚ほ足らざるを恐る。況や職事の暇なるをや。能者の為す所、不能者は固より測る可からざるなり」（原漢文、以下同じ）と驚嘆したように（ここでは十二分に發揮された。そして、その叙述はおざなりでかつ無味乾燥なものではなく、漢詩文の素養を生かしての詩情で潤っていた。

南畝の紀行文・日記と詩歌の関係については、揖斐高氏の発言

がある。⁽⁶⁾それは南畝の紀行文・日記においては、旅中に成った詩歌は本文と切り離して、巻末または別本として集成されていたという一事を指摘して、「細推物理」の精神に基く南畝の紀行にあって、旅中の詩歌を本文と切り離しておくことは、文体の生理として必要な処置だったに違いないのである」とされたものであった。揖斐氏も指摘されているように、南畝が紀行日記の本文と詩歌を別仕立てとしたのは、「狂歌のために汚名を得てしまつたという悔悟」が南畝に存したためであり、ゆえに『改元紀行』の本文末には「折からの詩歌も書つらねまほしけれど、いさや川いざと口かためしちかひもあれば、巻の末に附して録せり」と書きつけられている。しかし、これは詩歌を本文から切り離すことで、南畝自身の好古癖や考証癖を満たし、日常的に生起する事象を克明に記録することを通して「細推物理」の快楽を味わうといったシステムを有効に機能させるための処置として片付けてしまうわけには行かない。南畝の紀行文・日記は自作の詩歌を取り除いてもなお十分に詩情で潤っており、そこに詩歌を挿入すると、かえって散文でありながらもそこには詩情が氾濫してしまうかの観を呈するのである。南畝はそれを避けたいと思われる。南畝は詩歌を本文から切り離し、紀行文中の詩情をある程度抑制することで、かえって紀行・日記本文の味わいがより効果的な余韻嫋嫋たるものとなると考えたのではないかと想う。その結果、一見する所「旅の個別的な体験事実を主眼とした見聞記としての紀行」であるか見えながら、柳田国男が「一日一処の記事としては何の奇も無いやうだが、全編としての妙趣は自然に人を引付け

て、末には筆者と共に「悲一笑せしめる程の力を持つて居る。紀行の目的からいへば是くらゐ効果のある文章は無いと言つてよい」⁽⁸⁾と激賞するまでの作品となつてゐるのだと考へる。つまり「細推物理」の精神を發揮する即物的な事実の羅列と見ゆるやうなだけでなく、南畝の詩情に包まれてゐるゆゑに印象鮮明なる叙述として効果を挙げていると思ふのである。以下に従来指摘されてゐない事例を挙げて、筆者の主張を裏付けてみよう。

二

『調布日記』文化五年十二月廿日の記述には「駕籠にのりて宿河原のやどにつく。あるじを彦左衛門といふ。家居も心にく、住みして、庭に一木の梅の花さき出たり。けふは節分なれど、鯛の頭柢もなし。童子の肥てたくましが、升にいり豆をいれてまく。隣々にも同じ声するに、故郷のうまごどもの事わすれやらす、酒のみてふしぬ」と見える。杉浦氏の言う、「丹念に目にふれたものを書きとめてゐる」ものに過ぎないかも知れないが、宿河原の旧家の梅の開花に春の訪れを感じ、その証としての節分の習俗をスケッチして、現地の豆撒きする兒童の姿と声とに江戸で留守をしてゐる孫の面影を重ね合わせる流れには詩情が掬しうる。この情景をそのまま南畝は五言絶句に詠じていた（『玉川余波』「立春前一夕即事」）。

竹擁千竿翠 竹は擁す 千竿の翠

梅含一朵花 梅は含む 一朵の花

客中忘節序 客中 節序を忘れ

驚見郷人儼 驚いて見る 郷人の儼するを

詩を読むと彦左衛門という宿河原の旧家の庭には竹の緑も美しかったことが知れる。転結句の旅の空の下にあつて、節分の訪れも忘れていたので、土地の人の豆まきに立春を思い出したというのは、日記の「けふは節分なれど」という句を考慮すると、趣向立てのための詩的虚構であると思われ。日記、詩の双方で叙した梅花についてはさらに狂歌で、

鶯の宿河原とて春よりも先に立枝の梅の早咲

と詠んでもいた。立春前日に梅が咲いていたという事実には、宿河原という場所に「鶯の」と附けただけの、狂歌としては穩当な表現だが、南畝がこの早咲きの梅を愛でていた気持ちは伝わる。仮に日記の叙述に加えて、この狂歌と漢詩とが列挙挿入されていたら、少しづつその詩歌文の趣向の焦点はずれてはいるけれども、詩情は氾濫し、このくんだり、ややつこさの残る後味となることは見易い道理であろう。

十二月廿三日には「農家にいひこひて、古川薬師にまうでぬ。年頃此仏の事をき、しが、ことし六十にして、はじめて来れるもいかなる因縁にや。門をいれば、大さ牛をかくすといひけん大木の銀杏二本ならびたてり。かのち、といふものあまたたれて、目を驚す見ものなり。もろ人、願をかけしと見えて、紙にてむすびたるかたみゆ」などと見える。

この時も漢詩一首が成つていて、『玉川余波』に見える（『古川薬師堂』）。

古川香閣奉醫王 古川の香閣 医王を奉ず

竹外村煙細路長 竹外の村煙 細路長し

雙樹陰垂白杏子 双樹 陰を垂る 白杏子

午天晴映瑠璃光 午天晴れて映ず 瑠璃の光

境内の二本の大銀杏に滴る「ちち」とは、一種の樹液であろうか。その白い樹液にまみれた銀杏を「白杏子」と表現したわけである。「銀」は「白」に通じるからもとより奇をてらつた表現ではない。日記本文に依存する表現で独立しえない。南畝の工夫は日記にはない、寺の傍らにあつた竹林を叙した承句にむしろ存するであろう。ここでもそのまま一首の詩となりうるような叙述が本文の中に溶かし込まれていることと、それが故に詩歌が切り離されていても行文に詩情がたゆたつていゝことを確認できればよい。

三

十二月廿九日はこの年の大晦日であつた。この日の日記はとりわけ抒情性に富んだ味わい深いものである。

陰。宵に雨ふり、夜半より南風つよし。けふは小尽の大晦日にて、江戸にありなばいとまなかるべきを、旅のやどりのしづかなるまゝに、朝とく起て庭にあゆむ。庭ひろくつくりなして、松あり、梅あり、柳あり。石をたて枯木をすえて、心ありげにつくりなしたり。垣をへだて、遠く望めば、玉川のむかふにつらなれる山みゆ。河原近くて、水音もきこゆるばかりなり。一むら竹のしげりたるに鳥のなくこゑなど、山靜如太古、日長似小年といふ句も思ひ出らる(以下略)。

南畝は年末年始を是政村の川辺五郎右衛門の家で迎えた。すでに触れたように年内節分の風俗に江戸の孫を思い出したり、廿二日に古市場村の宿で富士山を望見しては江戸の自宅の書齋を懐かしむ自分に老衰を自覚し、廿三日に八幡塚村近傍で芝増上寺の鐘を耳にしても郷愁のよすがとしていた南畝だが、川辺家での大晦日はその庭の風情といい、玉川を隔てて見える向ヶ丘の景観といい、江戸で迎える年末とは違つた静謐さに支配された空間が頗る気に入つていたようである。庭の竹やぶに囀る鳥の声に、南畝は一聯の漢詩句を想起するが、これは北宋の唐庚の五律「醉眠」の首聯であつた。何故に南畝はこの一聯の詩句を想起したのかといえば、第四句に「好鳥眠ることを妨げず」とあるためであつた。つまり、川辺家の庭の竹やぶで聴いた鳥の声がゆくりなく南畝をして唐庚の「好鳥不妨眠」という句を思い出さしめ、その首聯を引用するに及ばしめたわけである。従つて、日記本文中には形容の語は無いけれども、川辺家の庭に舞い降りた鳥は自ずから「好鳥」なのであり、そのさえずりは決して喧しいものではなく、「眠りを妨げ」ず、「太古」のような是政村の静謐さを破らない好ましいものであつたことが言外に語り込められていることとなる。南畝の和文における漢詩の引用は、単なる術学的な文飾では決してなかつたのである。

翌文化六年の元旦の日記は次のように書き出されている。

けふは公事もなく心静なれば、日高うなるまで朝ぬして、三竿の影障子にうつるほど、庭に下りたちてあゆむ。あるじのかたより湯をひき給ふやと問ふ。此あたりのならひなるべ

し。去年元日のあした、筆とりて児孫共献三元寿、不羨千金
与万鍾、とからうた書し事など思ひ出らる。や、ありて雑煮
の糕もて来れり。餅ゐに菜、長いも、里芋をまじへ、むかふ
に独活、柿、こんにやく、三島のり、椎茸を細にきりて、酒
にひて、中に梅花をそへて皿にもれり。又、数の子と田つく
りとも皿にもれり。

この時に出来た漢詩を『玉川余波』から引用する（元日萬是政
村）。

華甲重回己巳春 華甲重ねて回る己巳の春

留連半月玉河濱 留連すること半月 玉河の浜

三竿影静迎元日 三竿影静かにして 元日を迎ふ

五畝田閑遠世塵 五畝田閑かにして 世塵を遠ざく

送却玄夷滄水使 玄夷滄水の使を送却して

疑為太古葛天民 太古葛天の民なるかと疑ふ

忽逢盤上椒花發 忽ち逢ふ 盤上椒花の発

眷戀兒孫憶所親 児孫を眷恋して 所親を憶ふ

首聯では、還暦を既に半月を過ぎ出した出張先の玉川のほとり
で迎えた事実を叙する。第三句目は「日高くなるまで朝ゐる」に
対応して「三竿」の高さに登った初日の出を描く。四句目は是政
村周辺の静かな田園地帯の叙景。第五句目は中国太古の伝説の皇
帝禹の故事を使う。禹帝が治水工事の方法を記した金簡玉冊のあ
りかを夢の中で、「玄夷滄水使」に教えてもらい、それを手にし
て工事を完成させたというもの。南畝が勘定所の役人として多摩
地区の治水工事の監督にやって来たことと符号する。第六句は是

政村周辺の農民があたかも中国太古理想郷の住人のように見える
ということを詠じる。この第六句で「太古葛天民」を詠じたこと
は、南畝が川辺家の竹やぶの鳥の声から唐庚の「山静かにして太
古に似たり」を想起したことと脈絡を有する。日記も三月頃から
起筆されているから、漢詩と日記とのいづれが先に成ったかは定
かでないが、日記が先だとすると、唐庚の詩句から第六句が趣向
されたこととなるし、漢詩が先とすれば、是政村周辺の農民を太
古理想郷の民と見なしたことが、庭先散歩の折に唐庚の詩句を記
憶の中からたぐりよせたこととなる。因みに『玉川余波』の他の
漢詩においても「行くゆく看る 水道年に随つて変ずるを、天地
寧んぞ太古の民に非らんや」（立春巡視玉河）、「松間殺風景と喝
道を太古理想郷の民に擬している。後者は松林にふんどしを曝すこ
とを殺風景とした李商隱「義山雜纂」の故事を転じて、風流を解
するものならば愛でるべき松林を殺風景と罵り、土地の住民を酷
使して治水工事を行う俗吏としての自画像を苦い自嘲とともに描
くものである。日記ではこまごまとした献立が叙されている
が、川辺家でのお屠蘇とおせち料理とを詠じるのが第七句で、第
八句は日記本文で、江戸の自宅で児孫に囲まれての質素な仕合せ
を詠じた去年の元旦をその時の自作の漢詩句とともに思い出した
ことと関連を有する句である。

かように公務の旅の記録たる『調布日記』と『玉川余波』とは
別仕立ての冊子とはなっているが、詩情がすべて『玉川余波』に
収斂されてしまったわけではなく、『調布日記』の叙述の中に依

然として濃厚にたゆたっているのであり、南畝の詩心は両者を自在に往還するものとして我々に感得される。

四

一月廿二日に南畝は登戸村の宿から向ヶ丘界限を巡視した。仏福寺から安立寺へと回って、安立寺の裏山に登る。ここにはふんだんなる漢詩文の引用と共に、南畝の紀行日記における詩情の問題を考えるに逸せない文言が見える。

やう／＼木の枝をとり笹原をよぢのぼる。巉巖をふみ、蒙茸をひらくといひしきはあらねど、所々にくぼかなる所は、野猪のうがてる穴なりときくもおそろし。絶頂にのぼりて林間にいこふ。こゝは飯室山といふ山也。目にみる所ひろくして、筆にも尽しがたし。田面はるかにみわたされて、人家よきほどにへだり、田かへす男、草かる童、尺馬守人といへるうつし絵に似たり。かすめる空のはてしなきに、富士の根の高く聳へたるに玉川の流のきよく曲りて、九回の腸に似たりといへるからうたも引出つべし。此境に至りては、詩歌の言もわすれつべく、風雲の想もまじはるべからず。たゞ無何有の郷にいらて、広莫の野に遊ぶかと疑ふ(以下略)。

「巉巖を履み、蒙茸を披く」は、南畝も明記するように北宋の蘇軾の「後赤壁賦」(『古文真宝後集』)の中の句であり、南畝が山道の岩をふみ、藪や灌木を掻き分けて進んだことを形容する。続く「虎豹に踞す」も「後赤壁賦」に見えるが、「きはにはあらねど」

とあるので、虎や豹に擬せられるほどの大岩は、飯室山には無かつたのである。

南畝は「九回の腸に似たり」の語を以て玉川の屈曲した流れを形容するが、これは柳宗元の詩句「江流は曲れること九廻の腸に似たり」(『唐詩選』所収「柳州の城樓に登りて潭・汀・封・連の四州に寄す」)を念頭に置いてのものである。飯室山からの玉川の眺望を、柳州の高殿からの長江の眺望に擬したわけである。直前に「富士の根高く聳へたるに玉川の流のきよく曲りて」とある。富士山を江戸漢詩では「芙蓉峰」と称することを知っていれば、柳宗元詩の第三句に「驚風乱れ颺く芙蓉の水」とあるのとも連関を有するであろう。「芙蓉の水」という詩語が富士山の姿の映った多摩川の川面とも解しうるからである。かく南畝の漢詩引用は、先の唐庚詩もそうであったが、人口に膾炙する詩を引用するだけであつて、引用されていない部分にも思いを致してのものであり、そこに気付かないと文章の味わいは半減し、挙句の果ては全くこのあたりの消息に感付けぬ鈍磨した自身の感性に何の反省もないままに、杉浦明平氏の如く、「蜀山人の紀行はまったく退屈でうんざりする」などと暴言に類する酷評を臆面もなく吐き散らすに近代人としての傲慢さを露呈するに至るのである。

かくも漢詩文を鏤めながらも、飯室山々頂の絶景を言語に絶したものとわんがために、南畝は「此境に至りては、詩歌の言もわすれつべく、風雲の想もまじはるべからず」と書き綴つた。これは裏返せば、南畝の紀行文・日記は通常は意識的に「詩歌の言」を念頭にしたためられるものであり、「風雲の想」に裏打ちされ

ているものであると語っていることとなる。既に列挙して来た事例にも明らかなのはあるが、南畝の紀行日記が豊かな詩情を備えている所以である。

五

翌一月廿三日は登戸から発して、中の島村を経て、向ヶ丘の一角をなす山の中腹にある菅村の寿福寺に訪いを入れた。住職の衡山和尚は七十歳の超俗的な僧侶で、漢詩をよくした。南畝は衡山の超俗ぶりと住居のたたずまいとに羨望の念を覚えて「この住るこそうらやましけれといひしことのはも思ひ出られてはづかし」と記す。これは『新古今和歌集』巻十七、雑中、僧慈円の「山里に訪ひ来る人のことぐさはこのすまひこそうらやましけれ」をふまえての記述である。南畝は実際に隠棲への羨望の言を呈したのであろう。そしてそうは言っても、官職を擲ち、係累との縁を絶つてまで隠棲することをよくはしない胸中を衡山に見透かされるような思いを味わったというのであろう。ここの引歌にはそこまで心理的ドラマが読み取れる。古歌を試みずからの心懐を語らしめる。これがぐくぐくしい心理描写を事とする西洋仕立ての近代文学の対極にある日本古典文学の骨法である。

南畝は衡山の詩を「己巳試筆」を引用した後、常套を破つて衡山の作に次韻した自作の詩も日記本文に挿叙する。もちろんこの詩は『玉川余波』にも重出する（『調布日記』「席上走筆奉和衡山禪師瑤韻」）。

梅花世界入芳辰 梅花の世界 芳辰に入る

苦海慈航字々新 苦海の慈航 字々新たなり

俗吏松間行喝道 俗吏 松間 行くくく喝道す

閑房逢着六朝人 閑房に逢着す 六朝の人

日記の中に「書院の庭に大きな梅の一本さかりなり。奥の方に入みれば、船の形につくりなせる紅梅のつぼみ艶にして、いまだひらかず」とあって、さかりの梅が庭内にあることを受けて起句が出来た。承句は「庭に方池あり。水は山より出る水を寛してとる」と記される如く、境内の池からの連想で、この文字のある僧侶が日々その文筆の力を使って衆生済度に勤しむさまを表現したものであろう。転句は既に触れた「自遣」詩と同じく、李商隱の「松間喝道」を使って、南畝が自己を松林の趣も解さぬ「俗吏」であると自嘲するものである。結句は、中唐、張籍の七言絶句「逢賈島」（三體詩）の「僧房に逢着す 款冬花、寺を出でて吟行すれば日已に斜めなり」を踏まえる。「六朝人」とは竹林の七賢などの超俗的な晋人を指す場合が多い言葉であるが、ここではその時期の高僧として著名な慧遠を想定させる語であらう。南畝は衡山を慧遠に擬して挨拶しているのである。

一月廿五日の日記はこう書き出される。

よべの雨はれて、深巷明朝売杏花ともいはまほしと思ふに、吾園のからも、の花いかゝならんと思ふ。

前日の日記の結びは「春雨しめやかにふれば、若鮎をなめ、酒のみてふしぬ」であった。鮎は登戸の宿の主人の母の心遣いで宿河原の漁師三次が捕獲したのを供せられたものである。雨音を聞きながらの酒がよい味わいであったと察せられるのは、この日江

戸に居る末の孫が天然痘を患っているのに、人をして梨を携えて見舞いにやったところ、すでに膿を出して瘡蓋をつける段階となっていたと知らされ「うれしなどはよのつねなり」と喜んでいたのである。雨音も心地よく聞きなされたに違いない。江戸の自宅の庭前の杏の花が雨に濡れてどうなったかを思いやる南畝の心は、末の孫の安否を気遣うそれと重なる。この一節が詩美に輝く所以である。またそこに挿入されている「深巷明朝杏花を売る」は南宋の陸游の詩句であり、「臨安にて春雨初めて齋る」と題する七言律詩中の一句で、前接する句は、「小楼一夜春雨を聴く」であった。南畝がこの詩を早くから愛好していた上に、つい二週間ほど前に旅の宿で携帯してきた陸詩を抄出したものの中にもこの一聯が含まれていたことについては別稿でも述べたので繰り返さない。いずれにせよ、孫の回復の喜びに浸りながら聞いた「しめやか」な春雨の音が、端無くも近頃おさらいしたばかりの愛好する詩句「小楼一夜春雨を聴く」を想起させ、その詩句自体は引かずに、続く「深巷明朝売杏花」を日記本文に挿み込んだのである。さらにこの詩句の「深巷」が登戸村よりは江戸の自宅のたずまいに似つかわしいものである故に、自宅の庭先の「からも」の安否と孫の安否とを結びつけているのである。くどくも言う通り、南畝紀行文の引用漢詩は行文に詩情を横溢されるのに十分に機能していることが知れる。

二月七日の記述も味わい深い。

天気よし。辰の時半に峯村のやどをいで、門辺に出れば、梅花さかりなり。小だかき所にのほりみれば、玉川の流きよく、

岸辺に畑うちて、見どころあり。あはれつかへをかへし、いとまある身とならば、このあたりにあしの小屋ぶきして、おり／＼かよひすみなんには、心の塵もきよかるべきをなど、あらしごとにいひ出るを、あるじの翁うちき、て、やすき事なり、とく来りすみ給へかし、いづくにてもかしまいらせんといふ。林下何曾見一人といひしたぐひなるべし(以下略)。

玉川の田園風景に魅せられた南畝は、せめて川のはとりに小屋なりとも築いて、別宅として通いたいという。しかし、そこに通うためには致仕して暇な体とならなくてはならない。宿の主に隠棲願望を披瀝した処、すぐにも場所を提供するから移り住むとよいと言われるが、そこで引用するのが「林下何ぞ曾つて一人を見んや」という漢詩句である。詩を学ぶものには、「林下」というだけで隠棲を意味することは常識となっている。「林下何曾見一人」一句も典故となりおおせているが、日本語に漢字を使用する習慣は続けながら、その根底をなす漢詩文の学習を軽視し、一過性の虚栄に踊らされて、英語学習や国際交流などに狂奔する現在の日本人にとっては意味がとりにくくなっている。かかる含蓄のある日本古典文学の深奥を外国人に丁寧に解析してみせるのが、「国際化」時代の日本の学問研究の責務であるはずなのに、そのためのトレーニングはおざなりにされたままなのである。

この句は『三体詩』に見える。僧、靈徹作の七言絶句「韋丹に答ふ」である。

年老心閑無外事 年老心閑かんにして外事無し

麻衣草坐亦容身 麻衣草坐亦かた身を容る

相逢盡道休官去 相逢て尽く道ふ 官を休め去ると

林下何曾見一人 林下何ぞ曾つて一人を見んや

前半は僧靈徹の閑居の佇まいを叙し、後半は靈徹が接する俗物の常態を叙したもので、「逢う人は皆役人を辞めてあなたのように隠棲したい」と口では言うが、実際にこの隠棲の地にやって来た人を未だかつて見たことがない」というものである。中世の抄物の成果の一つとして近世期を通じてよく行われた『三体詩素隠抄』（寛永十四年、二条寺町西田勝兵衛版）につけば、「韋丹ガ方カラノ、來詩ニ、我モ婦休シテ、共ニ君_ト居スト云フ程ニ、又例ノ口バカリノ、虚言ヲ、ウケタマワル、モノカナ、尋常相逢テハ、誰モ為_レ我婦休セウト、云ヘトモ、一人デモアレ、林下へ、ヒツコウダル人ハナイゾト云テ、ツヨク韋丹ガ口デバカリ云テ、心ニハ貪_レ禄をソシルソ」と記されている。中国でこの詩が典故となっていた事情については「是ヨリシテ、故事ノ様ニ林下嘆_ニ何曾_ニナント、東坡モ作ハ、此ノ詩カラス」とある。所引の蘇軾の詩は「朱瑤の画ける文殊普賢菩薩三首」のその二に「林下の意を教ふること莫れ、終老 何曾を歎ぜん」という一聯を指す。隱遁を勧めてくれても、なかなか実行に移せないのだから、隱遁を勧められるなという意味であろう。「素隠抄」は続けて、歐陽修がこの靈徹の詩が石に刻されているのを見て作者を始めて知ったという故事（『歐陽文忠公文集』集古録跋尾「唐僧靈徹詩」）をも紹介する。

南畝の漢詩句引用は、自分も韋丹同様の「禄を貪る」俗物であるから、口では玉川のほとりで隠棲したいなどと云ってもなかなか実行には移せないという諦念を表白するためのものであったの

である。

この引用もまた単なる文飾や銜学に止まるものではなく、詩句の引用部分を見て引用されなかった部分までも想起しうる読者を想定して、自身の本音を託しての修辭であった。このくだり、かりに漢詩句に籠めての叙述とせず、連綿と隱棲願望を書き綴ったとしたら、老いの練習を聞かされるような冗漫な印象を伴ったであろう。先人の句に語らしめることで叙述をすつきりとさせ、なおかつ詩情を漂わせることに成功している。『調布日記』は写本で行われたもので、自筆写本は日本大学総合学術情報センターにあるが、全集が底本とした内閣文庫所蔵のものは齊藤月岑の書写に係るものである。かように南畝の詩文を書写回覧するその交遊圏の読者は右に見てきたような南畝の修辭の妙を味わいたはずである。彼らに比してわれわれ現代人の読解力の低下は既に嘆くには深刻なものに過ぎる。

同時に右の一節は、一月廿三日のくだりの「このすまひこそうらやましけれ」という『新古今』の歌曲の引用とほぼ同じ機能を果たしていて、和漢の好一対をなしていることにも気付く。いずれも美しい自然の景観に囲まれての隱棲を羨望するにはしても、それは口で言うだけのことであって、所詮実現することのない夢であると語っているのであった。

南畝の紀行文・日記においては、地の文はおおむね和文で書き綴られているといつてよいが、和漢の詩歌が均等に、むしろ漢詩に比重を置いてなされている。「男もすなる日記」が漢文で綴られていたことを前提とすれば当然のことである。紀行文・日記中

の詩歌は、ともに単なる文飾にとどまらず、たとい自作の詩歌は巻末にまとめられたり、別冊仕立てになつていようと、残された引用詩歌だけでも、行文を十分な詩情で潤わせるに足るものがあり、作者の心懷を託することすらあるという重要な機能を果たしていた。しかしながら、従来の国文学研究の枠組みでは、右の事例の中で、『新古今』のケースなどは解析することを常として来たが、漢詩の引用とその機能については十分にその意義を掘り下げずに閑却してきた。しかし、それではかつて井上宗雄氏が「定家とともに言語の天才を感じる」と指摘された(私信) 大田南畝の鋭い言語感覚の片面、否、ほんの一部分しか見ていないこととなる。この状況が続いて行く限り、その狂歌戯作の一部だけを論じて滑稽頓知の才を称賛されるも、深刻さ真面目さに高い価値を置き、笑いや滑稽を貶める近代主義的藝術観によつて葬り去られ、相変わらず南畝は正当に評価されないままであり続ける。くどくも言う通り、事は南畝だけの問題にとどまらぬ。近世文学研究、ひいては古典文学研究全体が、韻文のみならず散文においても、和歌以上に漢詩文が重要な役割を演じていることを闡明しなくては、作品自体がもっている本来の輝きを取り戻すことが出来ず、謙虚さを失つた進歩的知識人をして「まことに退屈で、うん

ざりする」といった悪評を吐き散らせしめ、作品を葬り去る暴挙を野放しにしたままとなる。

筆者は今後、『調布日記』や既に揖斐高氏に施注の備わる『壬戌紀行』は勿論のこと、それ以外の南畝の紀行日記にも取材して、引用詩歌の機能の種々相を少しづつ明らかにしてゆきたいと念じている。

注(1) 「紫檀樓古木」、『圓生古典落語4』(集英社文庫、一九八〇)。

(2) 『大田南畝全集』第二卷(岩波書店、一九八六)。中野三敏氏の解説によれば、この作は文化七年頃の作品となる。

(3) 『大田蜀山人 日本の旅人8狂歌師の行方』(淡交社、一九七四)。

(4) 同右全集第八卷(一九八六) 解説「細推物理の精神」。

(5) 『調布日記』、『玉川砂利』、『玉川披砂』、『向園閑話』は同右全集第九卷所収。『玉川余波』は第二卷所収。以下の引用も全集のテキストに拠る。

(6) 注(4)に同じ。

(7) 注(4)に同じ。

(8) 昭和版帝國文庫『紀行文集』解説。

(9) 『大田南畝の歌文における漢詩の機能』(『国語と国文学』、二〇一一・一五)。

(10) 新日本古典文学大系84『寝惚先生文集 狂歌才藏集 四方のあか』(岩波書店、一九九三) 所収。